

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780273

研究課題名(和文)女性の職業キャリア形成における標準学歴および追加的学歴の影響に関する実証研究

研究課題名(英文)Empirical Research on Gender, Occupational Career, and Recurrent Education

研究代表者

高松 里江(TAKAMATSU, RIE)

立命館大学・総合心理学部・准教授

研究者番号：20706915

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、日本においてどのような人がキャリア途中の学校機関への入学をしているのかを明らかにし、その意義を検討することである。分析には、学歴や職業についての客観的な情報を豊富に含む全国調査と、学歴や職業についての主観的な評価を尋ねたインターネット調査を用いて、統計解析を行った。分析の結果、相対的に学歴の低い者がキャリア途中で学校機関へ入学していることが示された。キャリア途中の学校への入学は、ライフコース初期の不利を挽回することが示唆される。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study is to determine what kinds of people in Japan enroll in educational institutions mid-career and to examine the significance of such decisions. My study involved a statistical analysis of the results of nationwide surveys that are a rich source of objective information about people's academic backgrounds and occupations and an online survey that asked people to provide a subjective assessment of their academic backgrounds and occupations. As a result of this analysis, I found that people with a relatively weak academic background tend to enroll in educational institutes mid-career. This suggests that enrolling in school mid-career is an attempt to recover from disadvantages experienced early in life.

研究分野：社会学

キーワード：ジェンダー 働き方 学歴 教育 再入学 リカレント教育 家庭 階層

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、現代の日本において、十分な職業訓練を受けられず、低技能・低賃金の職業に留まる者がいる状況がある。なぜ十分な職業訓練を受けられないか、その理由には、職業訓練を受ける機会が企業に雇用された正規雇用者に限られていることを指摘できる。企業の職業訓練に依存しないキャリアモデルを提示するために、本研究を開始した。

まず、先行研究から明らかになる日本の職業訓練の特徴を、3点確認しておく。第1に、日本では学校機関による職業訓練は限定的で、企業による職業訓練が主流であった。第2に、日本型雇用慣行のなかで企業は正規雇用者を長期に雇用し、これと対応して、(主として男性の)正規雇用者に充実した職業訓練を受けさせてきた。逆に、(主として女性の)非正規雇用者には充実した職業訓練を受けさせてこなかった。第3に、非正規雇用の場合は、技能を身につける機会が少ないため、低技能・低賃金の職から抜け出すことが難しい。こうした特徴から、1990年代以降、若年層を中心に正規雇用率が低下し、職業訓練機会に恵まれず、低技能・低賃金の職にとどまり続ける労働者を生み出すこととなった。職業訓練を受けられるかどうかを企業の雇用に依存するような制度では、雇用環境が悪化するときにはキャリア全体に及ぶ格差が生まれてしまう。

そこで、日本で新しい職業訓練のあり方を模索するため、学校機関による職業訓練に着目した。日本ではなじみがないかもしれないが、デンマークのように、企業に依存せず、学校機関による職業訓練を積極的に行なう国もある。学校機関による職業訓練は、企業による職業訓練を代替するものとして着目できる。学校機関による職業訓練の利点は、企業の特定の被雇用者に限らないことにあり、職業訓練の機会をより開かれたものにすることができる。だれでも、技能を身につけ、よりよい職業へ転職する機会を得られることを意味する。なお、職業キャリアの途中や成人後の教育・学習を指すものとして、リカレント教育(recurrent education)、成人教育・成人学習(adult learning)、生涯教育・生涯学習(lifelong learning)がある。これらと類似するものであるが、本報告書では、キャリア途中の学校機関への入学と表現する。

2. 研究の目的

それでは、日本では、だれがキャリア途中に学校機関に入学し、それはキャリアにおいてどのような意味をもつのだろうか。日本では、高校や大学等を卒業した後は、無職や失業を挟むことなく、すなわち間断なく労働市場に移行し定年まで働き続けることを、標準的な学歴、キャリア、そしてライフコースとみなしてきた(吉田 2014)。つまり、キャリア

ア途中に学校機関に入学することは、まれなことである。規範的にも数としても標準的なものではなかったこともあり、その実態はほとんど明らかではない。

そこで本研究の目的は、日本において、キャリア途中の学校機関への入学の実態について明らかにすることである。具体的には、次の目的をもつ研究を行う。(1)標準的な学歴をもつこと、あるいは、非標準的な学歴をもつことはキャリアにどのような影響をもつのか、(2)だれがキャリア途中の学校機関への入学をするのか、(3)キャリア途中の学校機関への入学はキャリアにどう影響したと評価されているかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、社会調査を用いて、統計的手法によって、キャリア途中の学校機関への入学の実態を明らかにした。具体的には次の通りである。

(1)標準的な学歴をもつこと、あるいは、非標準的な学歴をもつことはキャリアにどのような影響をもつのかを明らかにするため、全国調査である「2005年SSM調査」(2005年社会階層と社会移動調査)を用いて研究を行った。この調査には、詳細な学歴情報や職歴情報が含まれており、本研究の目的に合致するものである。

(2)だれがキャリア途中の学校機関への入学をするのかを明らかにするために、全国調査である「2015年SSM調査」(2015年社会階層と社会移動調査)を用いた研究を行った。この調査には、詳細な学歴情報や職歴情報が含まれており、本研究の目的に合致するものである。また、キャリア途中の学校機関への入学をする者は非常に少ないため、非常に少ない者を分析するための特別な統計的手法を用いた。

(3)なぜキャリア途中の学校機関への入学を行うのかを明らかにするために、独自にインターネット調査を実施し、研究を行った。キャリア途中の学校機関への入学をする者は非常に少ないため、二段階の調査を行った。まず、インターネット調査会社に登録するモニタに、条件を満たしているかを確認するための調査を行った。次に、条件を満たした者のみに本調査に進んでもらった。インターネット調査会社に登録するモニタにはキャリア途中の学校機関への入学を経験している者も多く、ランダム・サンプリングでは確保できない対象者を集めることができた。また、質問項目には「2015年SSM調査」とも対応するものを入れることで、全国調査を参照した理解をできるようにした。

4. 研究成果

(1)研究の主な成果

主な研究成果は、以下の通りである。

第1に、非典型性は、その後のキャリアに

対して不利な影響を与えていることが示唆された。

第2に、全国調査から、キャリア途中の学校機関への入学をしたことがある者は非常に少なかった。日本では、あまりみられない現象であることが分かる。

第3に、全国調査から、キャリア途中の学校機関への入学は、比較的学歴の低い者や出身家庭の暮らし向きが悪かった者によって行われることが示された。ライフコース初期の不利をもつものが、キャリア途中に挽回する側面も限定的ながら確認された。

第4に、インターネット調査から、大卒者のキャリア途中の専門学校への入学によって、やりがいのある仕事に就くことができたことと評価され、さらに、労働条件もよくなったことと評価されている。キャリアアップにつながることを示された。

第5に、全国調査・インターネット調査から、企業の職業訓練を受ける機会の少ない女性でキャリア途中の学校機関への入学を多く行うということは確認されなかった。

以上から、日本のキャリア途中の学校機関への入学がもつ可能性について理解したい。ひとつは、ライフコース初期の不利を挽回しうることが示された。また、キャリア途中の学校機関への入学はキャリアに不利にはならず、少なくとも主観的にはよい評価がなされていた。このことから、日本型雇用慣行のなかでは、就業し続けることを標準的なキャリアモデルとしているが、本研究により、そこから離脱しても有意義なキャリアを形成するキャリアモデルを示すことができた。

(2)本研究の意義

本研究の意義は以下の3点にまとめられる。

第1に、日本での非典型的な学歴、キャリア、ライフコースに焦点を当て、代替的な社会のあり方を模索しているという点である。日本では正規雇用として働く学歴、キャリア、ライフコースを標準モデルとしがちである。だが、正規雇用と非正規雇用の格差が大きいなかで、正規雇用か非正規雇用かという二項対立を前提とせず、より充実した学歴や、キャリアモデルを提示できたといえるだろう。さらに、キャリアにとどまらず、より充実したライフコースのあり方についても提示できたといえるだろう。

第2に、先進国共通の若年層の不安定就業問題に対する政策的意義が挙げられる。この数十年の間に若者の雇用が不安定になったのは日本だけではなく、先進諸国でもみられる現象であった。日本ではこの問題にほとんど対処できていないが、デンマーク等のフレキシテキュリティ政策をとる国では、雇用の不安定性をなくすのではなく、教育機関による教育訓練を積極的に行なうことで対処している。本研究は、ヨーロッパを参考にしつつも、異なるタイプの職業訓練を模索した点で政策的意義をもつ。

第3に、生涯教育・リカレント教育政策への示唆が挙げられる。生涯学び続けることは、文化的・心理的な豊かさをもたらすものでもある。本研究の結果は生涯学習が可能になるための条件を提示したものである。

引用文献

田文・2014.『「再」取得学歴を問う：専門職大学院の教育と学習』東信堂。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

高松里江, 2018, 「就職後の専門学校・大学・大学院への入学 だれが「再入学」を行うのか」SSM 調査研究会事務局『2015年SSM調査報告(教育)』, 130-145. (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/2015SSM-PJ/report5.html>). (査読なし)

高松里江, 2016, 「文献紹介: Gender Wage Inequality: The De-gendering of the Occupational Structure (Malcolm Brynin and Francisco Perales, European Sociological Review, 32(1), 2016)」『理論と方法』31(2): 356. (査読なし)

〔学会発表〕(計 5 件)

高松里江・久保田裕之, 「学歴の典型性とその後のキャリアに関する実証分析」第64回数理社会学会・札幌学院大学第1キャンパス, 2017年9月17日。

高松里江, 「大卒者の再入学と職業キャリアに関する基礎分析」第63回数理社会学会大会, 関西大学千里山キャンパス, 2017年3月15日。

高松里江, 「経済生活における他者への依存とジェンダー 暮らし向き意識の分析から」第67回関西社会学会, 大阪大学吹田キャンパス, 2016年5月28日。

高松里江, 「所得が上がるほど幸せか 準拠集団仮説の検討」第61回数理社会学会, 上智大学, 2016年3月17日。

高松里江, 「対人労働は仕事満足度および賃金満足度を高めるのか」第60回数理社会学会, 大阪経済大学, 2015年8月29日。

〔図書〕(計 3 件)

高松里江, 2015, 「海外に憧れる高校生はだれか ジェンダーの視点から」中澤渉・藤原翔編『格差社会の中の高校生: 家族・学校・進路選択』勁草書房, 総ページ196p, pp. 115-127。

Chin-fen Chang, Gui-hua Xie, Rie Takamatsu, and Young-mi Kim, 2015, "Where the Materialism still Matters: Self-Identity in Social

Hierarchy in East Asia” , Tarohmaru, Hiroshi (ed.), *Labor Market and Social Stratification in East Asia: A Global Perspective*, Brill, 総ページ 242p , pp.206-236.

高松里江, 2015, 「性別職域分離とは何か 男女間の格差をとらえる」数理社会学会監修, 筒井淳也・神林博史・長松奈美江・渡邊大輔・藤原翔編『計量社会学入門 社会をデータでよむ』世界思想社, 総ページ 284p , pp.62-63 .

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
<https://sites.google.com/site/rietakamatsu/home>

6. 研究組織

(1)研究代表者

高松 里江 (Takamatsu, Rie)
立命館大学・総合心理学部・准教授
研究者番号：20706915